

【論文】不登校生徒への支援を考える

橋 本 怜 (信州大学 理学部 数理・自然情報科学科)
庄 司 和 史 (信州大学 教職支援センター)

1. はじめに

文部科学省が公表しているデータでは、小中学校における長期欠席の児童生徒はおよそ200,000人に及んでおり、そのうち、文部科学省が示す不登校の定義に該当する児童生徒は、130,000人余りとされる¹⁾。これは児童生徒全体の約1.35% (74人に1人)で、中学校においては3.01% (33人に1人)という高頻度になる。

筆頭執筆者 (以下、私とする) は、信州大学在学中、中学校の自習支援や子ども無料塾、高校での授業補助、保育施設、高校生の議論のサポート・ファシリテート、不登校生徒の居場所支援を行う施設等、様々なボランティアを経験してきた。

その中で今回、「不登校生徒への支援」について、大学で開催されたある報告会で発表する機会を与えられ、ボランティア活動での学びや経験、自身の思いや考えをまとめたので、それらを報告することとする。

2. 居場所支援施設 H とはどんなところか

不登校生徒の居場所支援を行っている施設 H (以下、施設 H とする) は、平屋の小さな一軒家で、毎週水曜日と金曜日の午後に子どもたちが訪れて思い思いの時間を過ごす場所である。特に何をしなければいけないとか、何をしてはいけないというような決まりはなく、各々が自由にしたいことをする空間である。

訪れる子どもたちは、小学生から中学生である。中学生たちは、スマホでゲームをしたり音楽を聴いたりしていることが多いが、お互い非常に仲が良く、外に遊びに行ったり、トランプや UNO など遊んだりもする。外遊びは、ボール遊びやバドミントン、鬼ごっこといったオーソドックスな遊びが多いが、ときには釣竿を持ってきて近くの川で釣りをしたり、塀をよじ登って乗り越える遊びをしたりすることもある。また、隣の空きアパートの1室を自分たちで「幽霊部屋」と名前をつけて、ちょっとした肝試しをするといったユニークな遊びをしていることもある。小学生たちは、中学生たちに混ぜてもらって遊ぶことが多いが、中には小学生同士でグループになって遊んでいる子どもたちもいる。低、中学年くらいの子供たちのグループは、絵を描いたり、近くの河原を散歩し、いわゆるガールズトークに花を咲かせていることも多い。また、いま不登校である子どもばかりでなく、かつて不登校だった子どもたちが、学校帰りに施設 H に立ち寄って宿題や勉強をしていることもある。

このようにそれぞれに子どもたちが思い思いの時間を過ごしていて、とくに縛られるルールもないからか、非常にのびのびとした雰囲気がある。施設 H に来ている子どもたちは

皆、自らそこに来たいと思って来ているというところがある。

施設 H にはおやつがある。一般的におやつと言えばお菓子や飲み物を想像するかもしれないが、ここでは、味噌汁や漬物、新鮮な野菜や果物といったものが出されることが多い。お菓子も出されることはあるのだが、そういった場合は、お菓子はデザートのように添えられていることが多く、メインではない。おやつの時間は、子どもたちがみんなでテーブルを囲み、座って食べる。それは、上記のような内容のおやつであるせいか、どこことなく家族で食卓を囲むような、一家団欒的な雰囲気がある。

2005 年に成立、施行された「食育基本法」(最終改正 2015 年)の前文には、次のような一文がある。

「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要である。今、改めて、食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている。もとより、食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである。」

このおやつの時間には子どもたちの他者への心理的な距離を縮めたり、心を開かせたり、心の安定を保ったりする「食育」の意味があるのではないかと感じている。

みんなで同じテーブルを囲んで食べるおやつは、どこか人間的な温もりを感じるもので、そんな温もりは、子どもたちの他者への心理的な距離を縮めたり、心を開かせたり、心の安定を保ったりすることにつながるのではないだろうか。そういった意味で、このおやつの時間は、施設 H の特徴を非常に象徴的に表すものといえる。

3. 子どもたちの学校へ行きたくない・行けない理由

何度かボランティアに通い続けると、施設 H の子どもたちから学校へ行きたくない・行けない理由について話が聞けた。それは大きく分けると、①人間関係の問題、②周りの目が気になる、③授業についていけない、④朝起きられない、の 4 つであった。

①は、クラスメイトや友人との関係において上手く馴染めなかったり、いざこざやいじめがあったり、一方で、教員との関係において嫌いな教員がいたり、教員から暴言や暴力を受けたという問題である。

②は、遅れて登校したり、久しぶりに登校した際の周りの目に関する問題である。例えば、『遅れて学校に行くと「遅刻しちゃいけないんだよ」と言われた』、『(1年生のときから不登校で)2年生になって勇気を出して登校すると「2年生になったら学校来るんだね(笑)」と言われた』、『久しぶりに登校すると、周りの生徒や教員から腫れ物に触るように扱われた』というような内容を語ってくれた。本人としては、自分なりに頑張っているのに、周りの目がその頑張りを踏

みにじるように向けられているのである。おそらく、誰かが少しでも、“自然に”迎え入れてくれていたら、彼らの頑張りや勇気は報われていたかもしれない。

③は、なかなか内容が理解できず授業に出たくないと感じてしまったり、不登校による遅れを取り戻すのが大変だから余計に学校に行きたくなく(行けなく)なってしまったりするという問題である。中には、①とも関連するが、担当の教員との相性が悪く授業についていけなくなったり、授業に出たくないと感じてしまう子もいた。

ただ、ここで注目しなければならないのが、「本当は勉強したい」という声である。私は、彼らと話をする中で、彼らが、勉強することから逃げているのではなく、勉強に伴って生じる負の因子から身を守っているのではと感じた。「勉強したい」という気持ちや、「勉強しなければならない」という気持ちはあるものの、それを阻むように生じてくる負の因子、例えば、ついていこうと努力しても追いつかない理解、途方もなく感じられてしまう遅れ、教員との相性の悪さ等が彼らの中に存在しているのである。

④は、学校が始まる時間に合わせて起きられないという問題である。これはインターネットやゲーム、SNSの普及などに伴う夜型生活の影響かもしれないが、夜遅くまで起きてしまって朝なかなか起きられないというのである。非常に現代的な問題の1つとも言えるかもしれない。ちなみに、勉強のときと同じで、「学校に行きたい」という気持ちや「学校に行かなければならない」という気持ちはあるものの、朝起きられず、頑張っても遅刻してでも学校に行くと、②で見たような周りの目が気になるという状況になっていくということをお話する子もいた。

このような4つが、施設Hの子どもたちが語ってくれた学校に行きたくない・行けない理由であった。これらについて考えていくと、不登校は、彼ら個人に要因があるのではなく、多くの部分で環境因子的な問題ではないかと思われる。つまり、環境が変われば登校できるようになる子どもも一定数いるのではないだろうか。

4. 施設Hのよさ

なぜ、子どもたちは、施設Hに通うのだろうか。子どもたちは、施設Hについて、「気が楽」「行きたいときに行ける」「やりたいことがやれる」「言いたいことが言える」と話す。子どもたちが話すように、確かに、施設Hには子どもたちを縛るものがほとんどない。そのような環境の中で子どもたちは、施設Hに通うことはもちろん、施設Hで何を行うかまで、基本的には、すべて自分の意思で選択している。要は自分のやりたいことを自由に行っているのである。だから、子どもたちの姿は、非常に活発な様子が窺える。

やりたいことだけやるというのは、社会の中で生きていく上では問題であるかもしれない。しかし、この状況は、不登校、引きこもりという、一見、無気力で、意欲のない状態にいと想像される子どもたちも、心が高揚する対象や意欲的になれる対象が少なからずあるということの裏返しであるかもしれない。私は、ボランティアを続ける中で、彼らの心は枯れ果ててはいないということを強く感じた。

行きたいときに行き、やりたいことをやるという施設Hは、彼らの本当の姿を見せ、意

欲や希望を引き出すように働いているといえるかもしれない。

施設 H の大人たちは、基本的には子どもたちに何か直接的で支援的なアプローチを行うことはない。子どもたちに「これをやらせよう」「あれをやらせよう」などということはなく、教えたり、指示したりすることもない。唯一子どもたちに働きかけることがあるとすれば、それは会話である。大人たちは子どもたちのありのままを受け止め、子どもたちが心のままにいられる環境を確保する。そして、コミュニケーションだけは忘れずに子どもたちのありようを温かく見守っているのである。

施設 H の代表である N 氏は、大人は、「何もしない人」「待つ人」であるべきだと話す。子どもたちは子どもたちなりに一生懸命に現在（いま）を生きている。その頑張りや生き方を含め子どものありのままを受け入れて、子どもたちの思うようにやらせてみる。大人は、子どもたちが大人を求めるそのときまでは子どもたちを信じて待ち、いざそのときが来たら手を差し伸べるべきだというのだ。

5. 施設 H の子どもたちは何を求めているのか？

施設 H の子どもたちは、<自分の居場所>を求めている。この居場所とは、①好きなこと・楽しいことをしている瞬間、②自分のことを認めてくれる存在、③自分の話（思い）を聴いてくれる存在、である。

まず、①については、前述したように、彼らは好きなこと、楽しいことには非常に活発である。好きなこと、楽しいことをしている間は、自分のありのままを解放することができ、非常にイキイキとしていられるのである。この意味で、個々で過ごす瞬間瞬間が、まさに自分の居場所だといえるだろう。そして、彼らがそんな瞬間を過ごしているときというのは、毎回眩しいほどの笑顔を見せているというのが何よりの証拠である。彼らは、自分の居場所であるその瞬間を本当に大切に思っているからこそ、そのときを精一杯に楽しみ、心からの喜びが眩しいほどの笑顔となって溢れ出ているのだろう。

次に、②についてである。彼らには、「自分が否定されている」という感覚がどこか心の奥にあるように感じる。言い換えれば、「自分が認められている」という実感が得られなくなっているのだ。彼らは、自分が認められているという実感、自分のことを認めてくれる存在を求めている。彼らはそのような自分の居場所を求めているのである。

最後に、③についてである。以前、彼らが嫌いな先生や嫌いな大人の話をしてくれたことがあるのだが、その際に「話を聴いてくれない」、「自分の考えを押しつけてくる」といった不平不満を語っていた。彼らにとって自分の話(思い)を聴いてくれる存在というのは大切な存在であり、そんな存在を求めている。そして、そういった存在はやがて、自分のことを認めてくれる存在となっていくのだろう。彼らはそういう居場所を求めているのだ。

以上のように、施設 H に通う子どもたちは<自分の居場所>を求めている。ただ、よく考えてみればこの<自分の居場所>は、不登校の子どもだけでなく、誰しが必要とするものではないだろうか。不登校の子どもたちは、この<自分の居場所>の不足が著しいか、<自分の居場所>を求める気持ちに対して、少しばかり正直なだけなのだと思う。それゆえに、

不登校生徒への支援においてもそうだが、常日頃からすべての子どもたちと接する際にこの観点には気を配っていく必要があるだろう。

6. どう支援するか

ここでは、不登校生徒への支援について考えてみたい。これまで述べてきたように、不登校生徒の生の声から、たくさんの支援のヒントがもらえる。それらを私なりにまとめると、①<認める人>であること、②<待つ人>であること、③不登校は大切な<充電期間>だと位置づけること、④<何もしない人>であること、となる。この視点から、どう支援するかについてまとめてみたい。

(1) <認める人>であること

先述した学校へ行きたくない・行けない理由を注意深く見てみると、彼ら自身にとっては、自分を否定的に見られるような要素が含まれている。例えば、人間関係の問題や周りの目の問題の内容は、その子の存在や居場所、頑張りや勇気などが否定されるような内容である。また、授業についていけない問題に関しても、その子の理解や勉強のペースが否定されているともいえる。さらに、教員との相性の悪さも、彼らにしてみれば一方的に価値観を押しつけられていると捉えられなくもないのである。

つまり、不登校になってしまった理由を突き詰めていくと、重要な要素として「その子の否定」が浮かび上がってくる。したがって、その子のありのままを認めてあげること、そういった存在がいることが大切だと考えられるのだ。このことについては、アドラー心理学の育児目標の1つに子どもたちに「人々は私の仲間である」と感じさせることが掲げられており、子どもたちのありのままを受け入れていく、認めていくことが大切であるとも述べられている²⁾。このように大人が<認める人>であることは、アドラー心理学の観点から見ても大切なものであろう。

(2) <待つ人>であること

待つということは、簡単なようで非常に難しいことである。どうしてもこの社会においては、不登校は、進学できないのではないか、就職できないのではないかといったネガティブな印象がもたれやすい。そのため、周囲は、いち早く学校に行かせなければ等と焦り、早急に様々な対策を講じなければならないと考えてしまう。しかし、そんな焦りと、それに伴った積極的・直接的なアプローチは、逆効果となる可能性がある。そもそも、本人は、簡単に不登校になったわけではない。不登校という状態には、本人なりの相当な葛藤や決心があるはずである。つまり、本人が学校に行きたいとか、行かなければならないと思っていることとは別にして、その行動は、ある意味、頑なに「学校へ行く」という行動を拒んでいる状態ともいえる。私たちには、やりたいこととやりたくないことがある。やりたくないことを無理やりやらせられることが続いたら、私たちはどう思うだろうか。あるいは、やらなければならないことはよく理解しながらどうしてもやれないでいるということを責められたり、強制されたりするとどう思うだろうか。とくに、自分に働きかけてくる人が自分の親のように近い人であればあるほど、自分の思いを分かってくれないと

いう不信感が募るのではないだろうか。

また、待つということは、親などの周りの人々にとっても必要なことである。子どもの状態や気持ちを無視し、「学校へ行かせなければ」という一方的な思いで対応することを続けた場合、働きかける支援者自身の心は疲弊し、結果的に子どもを取り巻く環境が悪い方向へ向かってしまう恐れがある。その悪い環境は、子ども自身に悪い影響を与えることになり、状況をより悪化させてしまうのである。この意味でも <待つ人>であることは非常に重要であり、大切であるといえるのだ。

(3) 不登校は大切な<充電期間>だと位置づけること

待つことによって、必ず状況は変わっていく。それは、子どもを取り巻く環境が変化するということである。それは、例えば、自分を認めてくれる人や、助けを求めることができる人の登場であったり、自分に対する自信や、考え方、価値観の変化であったりする。不登校の状態でも何らかの行動や経験が積み重ねられ、何らかの変容が起こる。それがきっかけとなって状況はよい方向へと向かっていく可能性がある。不登校という期間をそういった変容を支える大切な<充電期間>と捉える必要がある。

(4) <何もしない人>であること

<何もしない人>というのは、(1) から (3) で挙げたことを踏まえた対応である。「何もしない」というのは本当に何もしないということではない。積極的・直接的アプローチをしないということである。子どものありのままを受け入れ、子どもを認め、子どもの変化を信じ、あえて積極的・直接的なアプローチはせずに充電が完了するのを待つということである。これは不登校生徒の支援において非常に大切な姿勢だと考える。

7. 課題となるのはどんなことか

(1) 信じること、待つことの難しさについて

先述したように、施設 H でのボランティア活動を通して、子どもを信じて待ち、消極的・間接的なアプローチによって支援していくことが大切だということを学んだ。一方、家族にとっては、信じることや待つことは、ある面、とても難しいことだということも事実かもしれない。不登校の子どもを保護者から、「信じて待つのは、それをする側にとって非常につらいものである」という話を聞いたことがあるが、実際の家庭では、さまざまな要素が複雑に絡み合うこともあって、なかなか信じて待つことは難しいのだとも思う。このことについて、施設 H の N 氏は、「不登校をよくないことだと思わないことが大切」だと話す。少々のことでも簡単に不登校になることは、まずない。本人にとっては相当に高く分厚い壁にぶつかっているわけである。それを理解することが大切なのではないかと、やはり思う。

(2) 学校へ行くことがゴールか

そもそも学校というものは、広く子どもたちに教育を施すことができるように、統一された内容を集団での一斉授業によって等しく教授していく効率化された制度とも考えることもできる。しかし、その効率化された画一的な制度は、とかくそこに上手く馴染めない

子どもたちを生み出すものである。

例えば、歴史上の名だたる天才の中にも、学校という空間において落ちこぼれや問題児の烙印を押され排除的な扱いをされていた人が存在する。アインシュタインやエジソンもその中の1人だったと言われる。学校という場に馴染める人間を作り出すことが、学校にとっても社会にとっても必ずしもよいことであるとは言えないだろう。

また、学校は勉強を教えるだけのところではないにしても、現状は、教科の勉強に重点が置かれている。ところが、実際は、スポーツができたり、音楽やものづくりのような芸術的センスを持ち合わせていたり、人とのコミュニケーションに長けていたり、ひときわ発想力や思考力に長けていたりといった非常に多種多様な資質・能力が、将来に活かされる可能性を秘めたものとして考えられる。

このように考えると、学校に行っていようとまいと、将来活躍する可能性を秘めた子どもたちは存在する。もっといえば、学校にただ通っているだけでは、個々の資質や能力は向上しないもので、むしろ、自らの勝負したいポイントを見定め、それぞれの個性を発揮するのであれば、学校へ行くことによる恩恵はないのではないだろうか。私の専攻は数学であるが、数学を学ぶ意味は、数学を通して、論理的な思考力や論理的な思考法、思考に対しての耐久力等を身につけていくことにあると私は考える。

このことは、学校が一つの手段に過ぎないということでもある。学校という場所は、とても有益な空間であり、そうでなければならぬと思う。しかし、学校だけが唯一の選択肢ではないと思う。人生全体を見据えた上では、学校に通うことを選択せずに、そのことによって大きく育つということもあるかもしれない。そういった意味で、私は、学校へ行くことが「唯一のゴール」とされてしまうことには問題があると考えている。

しかし、現状としては、学校に行かないということがネガティブにとらえられ、本人自身も自分が悪いことをしているという意識になってしまうところがある。その結果、社会に出て行くにあたっては不利益を被る場合もある。そのため、当面の目標は、学校へ行けるようになることとすることも必要だと言えるだろう。

7. おわりに

私は、不登校というのは、ある側面、<諦め>の形ではないかと思う。自分への<諦め>や他者への<諦め>の気持ちが不登校の裏には存在しているのではないだろうか。「自分は周りに比べて劣っている」、「自分のことを理解してくれる人などいない」、「自分のことを認めてくれる人などいない」、「自分の思いを聴いてくれる人などいない」、そんな思いが不登校の子どもたちには見え隠れするように思う。そして、そんな思いは、やがて「自分の存在で何かが変わることなどない」という無力感へと姿を変え、社会への<諦め>ひいては人生への<諦め>を生み出していく。

人は自分の思いや行動が、自分の努力や頑張りが“何かを変える”という実感がなければ、なかなか前向きな感情や意欲的な感情にはなれない。実感とまではいなくても、「自分の努力や頑張りが何かを変えるかもしれない」という信念や期待が必要なのだ。

しかし、すべての人がこのような実感や信念、期待を抱けているわけでもないかもしれない。不登校の子どもたちはまさにそんな子たちなのだろう。だからこそ、認め、待ち、本人の意思を尊重しながら消極的・間接的アプローチでゆっくり着実に、本人の<見える景色>を変えていくことが必要なのだと思う。

施設 H に通っているある中学 3 年生の男子生徒が、この春から高校へ進学する。彼は、昨年の夏、通信制の高校で行きたいと思っている高校があることや、そこでは部活動もあって自分は音楽が好きだから軽音楽部に入って活動してみたいこと、高校生になればアルバイトができるからアルバイトをしてみたいということなどを語ってくれた。彼は確かに比較的明るい性格で人と話すことも好きなタイプなのだが、こうやって何かをしたいと前向きになり、その思いを人に伝えることができるのは施設 H での支援があつてのことだと思う。彼は、中学校には一切通ってはいないのだが、その彼が高校に行きたいという思いを語っているのである。そういう思いを大切にしたいと思う。

謝辞

最後に、施設 H での経験というのは、それまでの不登校への認識や考え方を大きく変えてくれたものであった。その素晴らしい経験をさせてくださった施設 H の子どもたちや N 氏には、心からの感謝を申し上げたい。また、ボランティア活動を紹介していただき、ゼミ等を通して数々のご指導をくださった信州大学教職支援センター准教授の荒井英治郎先生に感謝申し上げます。

※ このレポートは、共同執筆者の庄司和史が主宰する「特別なニーズを持つ子供の支援を考える自主ゼミ」第 2 回例会において報告した内容をもとに、一部修正し、まとめたものである。

引用文献

- 1) 文部科学省「平成 28 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（速報値）」文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2017
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/10/_icsFiles/afieldfile/2017/10/26/1397646_001.pdf
- 2) 岸見一郎「アドラー心理学入門」ベスト新書，1999